

# 「新潟県の子育て百科」出版記念シンポジウム

## 講演

### 「子育て百科」の方法と意味

牧 柁 名

#### 一、「子育て百科」の意味

『子育て百科』は、「新潟から日本の教育を見る」という立場で編集されています。それは、新潟という特殊性を持ちながら、日本全体の普遍性を持つという意味で、有効な視点だと思えます。かつて上原専禄氏が取られた学問的方法と一致するものを感じます。

一歳くらいの子どもは、自分の指を使って触れるものを口に入れて、「何かな？」って調べてみます。また、泥をこねて遊ぶのが好きです。おだん子を作ったり、山や川をつくったり……。つまり、子どもの口は世界に

開かれた窓なのです。また泥あそびの中で、子ども自身は大地と一体化しているといってもよいわけです。

たとえがよかったかどうかはともかくとして、『子育て百科』もこねくり回して出来たことだろうと推察します。そうやって新潟の大地と一体化して、『百科』自体は、「世界に向かって開かれた窓」を作ったわけです。

「百科でなく三十科くらい」という話も先ほどありましたが、一冊の本にまとめるには当然落ちるものがあります。しかし次の諸点は、『百科』の重要な特徴です。第一に、新潟の子どもたちの実態から出発している

ことです。これはとても大切です。たとえば「子どもの権利条約」を物差しにして、そこから測定していいということなのです。

人でも物でも存在すること自体に価値があると思いません。存在は関係です。親と子の関係があって、意味や価値が生じます。その関係の質が問題です。

子どもを虐待する母の例をみると、自分の期待に合わない子ども、それを虐待する自分がいやになり、自殺願望になる、というようなことが起きます。子どもは存在すること自体に価値があるという意味はこのような事態をふまえています。親と子、教師と子ども、総じておとなと子どもの関係がどう変化したのか、人と人との関係がカネやモノの関係に置き換えられるようになって、それに馴れてきたのは何故? こうしたことを考えさせられます。

子どもの健康・あそび・学校生活など子どもが生きているその姿にそって、かれがとり結んでいる社会的関係の質を、この本は問うていることをまずあげておきたいと思います。

ありのままを描くこと、こういう時にはどうする(?)という期待にこたえるという面もおざりにでき

ません。いつも座右に置いて、わからぬ時には開いてみるというものに近づけようと努力されている面をみることができます。

第二は、全体として子ども時代を取り戻そうというメッセージが伝わってくる点です。子ども時代の心ととりわけ身体を重視している点です。子どもの古い大脳皮質を解放することが迂遠のようだが、多くの問題の解明に不可欠です。抑圧されつづけて育つ「よい子」ほどつらいものではありません。抑圧装置を打ち破り、大人への同調装置の精密さを競うことに歯止めをかけられなければ、いわゆる「いじめ」撲滅対策では成功しません。

第三は、新鴻を一國のようにとらえて、というのは卓見だと思います。子どもの権利を考える際、人権体系論からいって子どもは国家と向き合っていないません。子どもの権利は、国が認めたからあるのではなく、もっと小さな私的な市民的共同的結合体が保障するものです。したがって、子どもの権利保障は、市民的共同を基礎としてまずは自治体レベルによって保障すべきものでしょう。

## 二、その方法

『子育て百科』のような「子ども白書」は、いろいろな種類があります。身近のものやかかわっているものを例にあげると、「所沢子ども白書」、新座の「子ども白書」一二年ごとに統計的データを新しくして発行するなど。川崎子ども権利研究会発行の白書は、「川崎における人権保障のひとつとして子どもの権利を考える」という立場で作られています。九十五カ国からの外国人が住む川崎の事情が反映しています。これらを参考にして新潟の白書を見ると次のようなことに気がつきます。

にいがたの『子育て百科』の特徴のひとつは、不登校、いじめ、学童保育、障害児というように個別領域ごとに子どもの権利をとらえようとする方法です。

個別領域に即して探究して、新潟の子ども一般が見えるように出来ているかが問われています。

個別の行政の政策のねらいは説明できても、こちら側から攻め上ろうと明らかにしようとする、霧がかかったように不明になってしまいます。この方法の弱点といえるかも知れません。この意味では、子どもと

は何か、子どもと大人の接点は何か、などについて、抽象的でもよいから、全体を貫く子どもについての思想が展開されていてもよかつたのではないのでしょうか。二つは、新潟から日本をみるというユニークな方法です。子どもの生活から出発して改革までを展望しようという努力のあらわれと見ます。

しかし、それは必ずしも成功していません。子ども達が学校に閉じこめられている実情を反映しているせいでしょうが、学校教育のなかの子どもに多く割かれていて、子どもの生活が心と身体にわたって、広く明らかになくなっていません。

子どもの声もいくらかはありますが、子どもの生の姿がもっとほしい、子どもの全生活をカバーするように迫れたらいいなと思います。これは多くの「子ども白書」についていえることでもあります。また、定点観測的といえますか、三年〜五年に一回、今回と同様のところを続けていくことも重要だと思えます。どうしても、わたしたちは、その時々のことを問題にして、歴史的・実証的に考えるところという観点が欠けてくるきらいがあるからです。

さらにまた、人生の節に注目して、探究する方法も

必要でしょう。例えば、小学校一年生、中学校一年生  
 …など。

三つめに、「家庭常備本」ということにかかわってこ  
 れからの希望です。たしかに家庭常備本的の価値があ  
 るといえますし、その活用が大事です。

最近三十代の研究者が共同でゼミのテキストに「支  
 えあいの人間学」というのをつくりました。要点は、  
 その人の問題は、その人でなければわからない。しか  
 し、その痛みを共感あるいは共有することは出来る。  
 他人が自分を支え、自分が他人を支える。相手を信じ  
 ることなしに、それは成立しない。教員も生徒も同じ  
 関係にある。支える人も支えられる人に支えられてい  
 る面がある、相互的な関係にある、というのです。

『子育て百科』が、支えあいの関係が広がるつなぎ  
 の役目を果たしてほしいと望みます。例えば若い母親  
 の子育ての困難は深刻です。離乳食はどうしたらいい  
 か、保育所、幼稚園の入所(園)時期がなぜ固定してい  
 るのか、など等。支えあいの関係が広がる無数のきっ  
 かけがあります。そこに役立ててほしいのです。市民  
 相互の(より具体的には父親の会、母親の会など)ほっ  
 とできる生活交流の場を作りあげるきっかけにしたい

ものです。どんなにすぐれた本を読んでも、どれほど  
 立派な話を聞いても、ストンと胸に落ち、生活の中に  
 しみこんでいかねば意味がありません。そのための隣  
 人としてこの百科が役立つことを望んでいます。

さいごに、さらに遠い目標です。ひとつは、県レベ  
 ルよりも小さい自治体レベルでやれる運動を視野に入  
 れることです。例えば川崎では、外国人が市政に物申  
 せる機会を作れという運動をやっています。先にも述  
 べたように九十五カ国もの外国人がいる市ですから。

また、『子育て百科』にも校則の制定、改廃の手続き  
 等がのっていますが、それを生かした運動が必要です。  
 成果が見えるような運動がほしいものです。

八十八歳の元名古屋市長の本山政雄氏が、ある学会  
 で「近ごろの若い者は、社会的運動が不足」とおっ  
 しゃっていました。心していききたいものです。子ども  
 は国家の所有物ではないし、教育は国家の独占物でも  
 ないことはいうまでもありません。でも私的個別化が  
 すすむなかで、親についても、市民についても、その  
 結びつきの質を新鮮に問い直してみようではありませんか。

(まき まさな 駿河台大学教授)